

日本語対話コーパスにおける倒置構文について： 聞き手の反応に注目して

郭潔(千葉大学大学院融合科学研究科)
伝康晴(千葉大学文学部)

Inversion Expressions in Japanese Conversation: From the Viewpoint of Hearer's Reactions

Jie Guo (Graduate School of Advanced Integration Science, Chiba University)
Yasuharu Den (Faculty of Letters, Chiba University)

1. はじめに

大坊(2009)によると、コミュニケーションは、「伝える」ことと「伝えられる」ことから成り立つ。他者に伝える方法は言語的、非言語的のチャンネルがあり、言語的コミュニケーションはシンボルとして「言葉」を用いる。言葉を表出したものが文や発話であり、さまざまな表現形式を取る。一般に、自然言語の表現には決まった語順があり、日本語では、主語が前、述語が後ろ、修飾語が前、被修飾語が後ろという順序で配列される。しかし、実際の言語運用において、特に話し言葉では、必ずしもすべての文がこの語順を守るのではなく、さまざまな理由によって語順が変わっていく。そのうちの一つに、倒置構文というものがある。

藤井(1991、1992)は、日本語の語順は類型論的分類ではSOV型と認められているが、実際の発話においては目的語が主語の前に来るケースを始め、述語の後ろに文の要素が来るケースまで多様性を示しており、特に述語の後ろに文の要素が来る倒置現象は、話し言葉において特徴的なものであると述べている。そこでは、述語の後ろに倒置された文の要素を主に主語、修飾語などに分類しているが、詳細な形態論情報に基づく分析はなされていない。倒置構文の使用条件、特に話し手が一般にいつ倒置構文を使うかという要因について、郭、伝(2011)は、倒置構文の形態論的特徴と倒置構文をよく使う話し手の年齢、性別などの社会言語学属性の影響を明らかにした。そのほか、多くの言語研究者が伝達機能、情報提示方略と文法論など様々な観点から分析してきた。しかし、倒置構文の形態論的特徴と言語外的要因、特に聞き手の存在による影響に関する議論はまだ不十分だと言える。

コミュニケーションは、話し手の行為と聞き手の行為の間の相互参照的関係を必須のものとして含むプロセスで、聞き手による話し手の心的状態の解釈は、聞き手の反応的な行動を通じて、元の話し手によっても解釈可能なものとなる(高梨・榎本、2009)。話し言葉でよく出現する倒置構文が、このような聞き手の反応的な行動を話し手が参照することを通じた調整的な行為であるという視点から、本稿では倒置構文を用いる要因を検討する。

2. 方法

2.1 対話データ

分析対象は『日本語話し言葉コーパス』(Corpus of Spontaneous Japanese、以下CSJと略称)(前川、2004)の2人対話(インタビューデータ)である。

CSJには全体で約660時間(語数にして約700万語)の自発音声格納されている。その一部、約45時間(50万語)分は、同コーパスの「コア」と呼ばれ、書き起こしテキストに加えて、(人手修正済み)形態論情報(小椋、2006)や節単位情報(丸山ほか、2006)、さらに分節音ラベルやイントネーションラベルが提供されている。本稿では、2人対話(インタビ

ュー形式)の12対会話(3.6時間、約13万語)を分析対象とした。インタビューデータは、学会講演ないし模擬講演に関してインタビュアーが様々な質問を発し、話者がこれに答える形式の対話である。

2.2 倒置構文の認定

CSJにおいて、「コア」と呼ばれる約50万語分のデータでは、書き言葉の文に相当する「節単位」が付与されている(丸山ほか、2006)。ただし、対話データでは、節単位は一方の話者に対してしか与えられていない。そこで、最近になって開発されたCSJ-RDB(小磯ほか、2012)中の対話データを分析に用いた。このデータでは、両方の話者の節単位が認定されている。

節単位は以下のような考えに基づいている。「文」は、語とともに、言語表現を構成する最も基本的な単位として捉えられてきた。書き言葉では、書き手自身によって文末位置に句点が付与されるため、「文」の範囲を取り出すことは比較的容易である。それに対して、話し言葉では、話し手自身が文末位置を明示的に示すということはない。とすると、話し言葉の中から「文」の範囲を取り出すためには、何らかの手がかりをもとに「文」の範囲を認定しなければならない。節単位では、主に節末の表現形式に従って、「文」の切れ目を認定し、切れ目の強さに応じて「絶対境界」、「強境界」、「弱境界」の三種類を分類している(丸山ほか、2006)。

倒置構文は一つの節単位とみなされる。引用節中での倒置構文や言い換え、呼びかけなどは今回の分析対象と認めなかった。これらの倒置構文について以下のように本体と倒置要素を規定した。

<u>帰るんですね</u> 、 <u>実家に</u>
本体 倒置要素

「帰るんですね、実家に」という文は倒置構文であり、本体の「帰るんですね」と倒置要素の「実家に」の二つの部分に分けた。倒置要素が付加される要因を検討するという観点から、次の二つの語の形態論情報に注目した。

です：本体の次末(penultimate)単語
ね：本体の末尾単語

これらを倒置構文を含まない発話(以下、非倒置文と呼ぶ)の次末単語、末尾単語の形態論情報と比較した。ただし、あいづちやフィラー文などは非倒置文に含めなかった。

本稿では、倒置構文49個と非倒置文1561個を分析対象とした。

2.3 聞き手反応の認定

本稿では、倒置構文の使用の要因として、聞き手の反応に注目する。そのため、倒置構文本体末尾付近(タイプ①)と倒置要素末尾付近(タイプ②)および非倒置文末尾付近(タイプ③)での聞き手の反応を抽出した。

聞き手の反応を抽出する範囲として、末尾位置の0.5秒前から0.5秒後までを「末尾付近」と見なした(図1参照)。

対話における発話の産出・理解には相互信念が必要であり、一方、その相互信念は対話の進行に伴う発話の産出・理解を通じて蓄積される(Clark, 1996)。Clark(1996)によると、理解の証拠は主張(assertion)、前提(presupposition)、表示(display)と例示(exemplification)に分類され、その中で、主張の表現は主にうなずいたり、「うん」「はい」の類のあいづちを打つことである。一方、関連する次ターンを産出することは理解の「前提」とされる。本稿では、聞き手の反応を「あり」と「なし」に分けて、「あり」の場合は「あいづち」と「次ターン」に分けた。

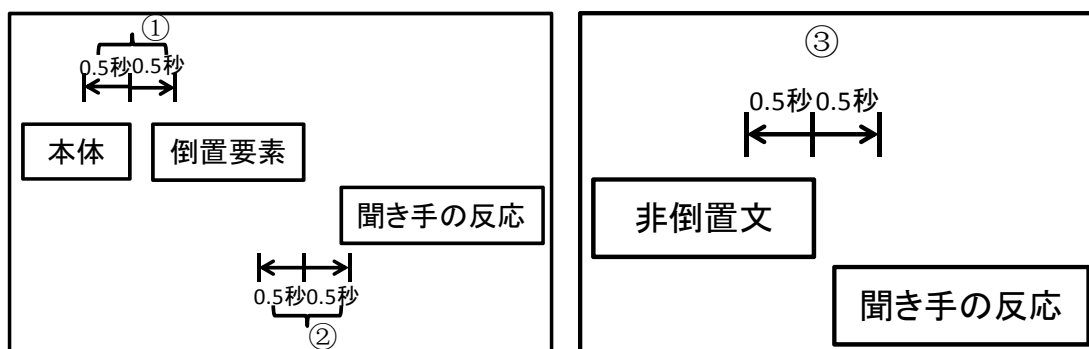


図1 聞き手の反応

3. 結果と考察

3.1 形態論的要因

3.1.1 本体の末尾単語の品詞の分布

倒置構文の本体の末尾単語および非倒置文の末尾単語の品詞の度数を図2に示す。倒置構文の本体の末尾単語において、「よ」「ね」などの終助詞が38個あり、倒置構文全体の77.6%を占めた。そのほか、接続助詞が12.2%を占め、助動詞が8.2%を占めた。これに対して、非倒置文で末尾単語が終助詞である発話は全体の47%に過ぎず、倒置構文の終助詞率はその1.7倍高い。そのほか、この図から、倒置構文の末尾単語の種類は非倒置文より少ないことが分かった。たとえば、格助詞、係助詞、動詞、形容詞、感動詞は非倒置文の末尾単語にしか出現しない。

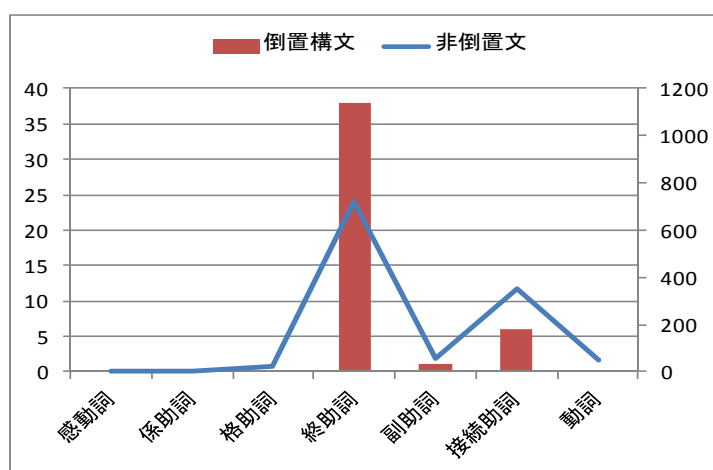


図2 本体の末尾単語の品詞

3.1.2 本体の次末単語の品詞の分布

倒置構文の本体の次末(最後から2番目)単語および非倒置文の次末単語の品詞の度数を図3に示す。倒置構文の本体の次末単語において、「です」「ます」「だ」といった助動詞が27個で、本体の次末単語の55.1%を占めた。しかし、非倒置文でも助動詞の比率は52.9%であり、倒置構文との差は大きくない。それに対して、頻度が二番目の終助詞(13個)は倒置構文全体の26.5%であり、非倒置文の終助詞率8.7%と比べて3倍あった。一方、動詞は3個で、倒置構文本体の次末単語の6.1%しかなく、非倒置文の動詞率(14.5%)の半分以下で

ある。他には、格助詞、係助詞、形容詞や形状詞、感動詞などは非倒置文だけで出現し、倒置構文の次末単語として出現しなかった。以上のことから、倒置構文の本体の次末単語においても終助詞が多いことが明らかになった。

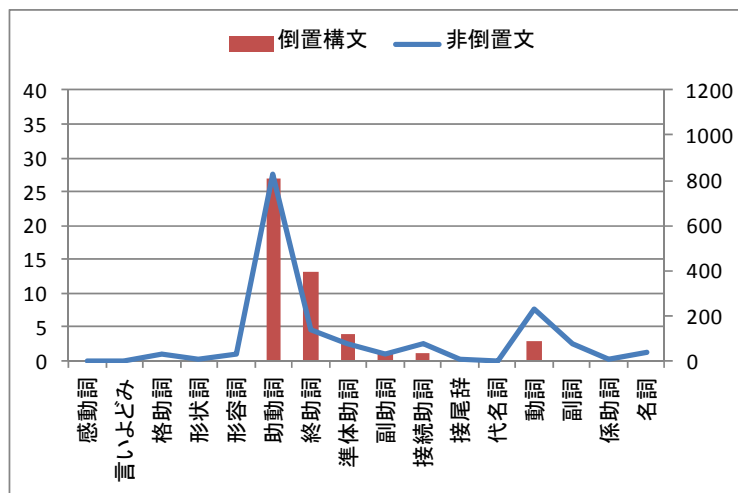


図3 本体の次末単語の品詞の分布

本節の分析から、倒置構文の本体においては、末尾単語でも次末単語でも終助詞の比率が非倒置文と比べてかなり高いことが分かった。終助詞は一般に聞き手に働き掛ける形式であるため、次に聞き手の反応に注目する。

3.2 聞き手要因

倒置構文の本体末尾付近と非倒置文の節末付近の聞き手反応の度数を節の種類ごと、聞き手反応のタイプごとに表1に示す。

表1 聞き手の反応

	絶対境界			強境界			弱境界		
	なし	あい づち	次タ ーン	なし	あい づち	次タ ーン	なし	あい づち	次タ ーン
倒置構文本 体末尾付近	18 46%	9 23%	12 31%	2 50%	2 50%	0 0%	1 17%	4 67%	1 17%
非倒置文節 末付近	366 39%	271 29%	294 32%	126 35%	194 54%	37 10%	144 53%	78 29%	51 19%

倒置構文本体末尾付近において、強境界と弱境界では倒置構文の絶対数が少なすぎるため、主に絶対境界の聞き手の反応を分析した。

表1から、絶対境界の場合、倒置構文本体末尾付近では、聞き手の反応がない場合が46%あり、非倒置文の節末付近の39%より高いということが分かった。

そこで次に、これらの本体末尾付近で聞き手の反応がない18事例について、倒置要素末尾付近での聞き手の反応を分析した。結果を表2に示す。

表2 本体末尾付近で反応「なし」の時の
倒置要素末尾付近での反応

	なし	あいづち	次ターン
倒置要素	11	1	6
末尾付近	61%	6%	33%

表2から、本体末尾付近で聞き手反応がなかった事例のうち40%近くで、倒置要素末尾付近で聞き手反応が得られていることが分かる。このようなパターンに当てはまる事例にはたとえば以下のようなものが見られた。

- L: 今何人ぐらいで(0.588)(F あ)(0.29)(D おひてい)基本的には一人で(0.121)やってらっしゃる(0.104)ですもんね <- 本体(0.12)
この(0.585)研究 <- 倒置要素
- R: (F えっと一)(0.434)(F あ)(D む)(0.137)僕の所属してる研究室で(0.44)は話し言葉の認識をやってるのは(0.143)(D む)そうですね僕一人ですね
(D04M0010:597.2014-612.0856)

このことは、話し手が本体を話した直後に聞き手の反応がないことに気づいて、倒置要素を付加した結果、聞き手の反応が得られ、相手との相互信念を形成することに成功したことを示唆する。これは倒置構文を使用する一つの要因と言えるだろう。

4. おわりに

本研究では、まず、倒置構文の本体の次末単語、末尾単語の形態論的特徴を分析して、非倒置文の対応する位置の単語の品詞と比較して、以下の結果が得られた。

① 倒置構文の本体の末尾単語において、「よ」「ね」などの終助詞が倒置構文全体の77.6%を占め、非倒置文の末尾単語の終助詞率よりかなり高かった。

② 倒置構文の本体の次末単語においても、終助詞は非倒置文と比べてずっと多かった。これらのことから、倒置構文の使用は、聞き手への働き掛けと関係していると言える。

そこで、倒置構文本体末尾付近での聞き手の反応を抽出した結果、絶対境界では非倒置文節末付近と比べて、聞き手の反応がない比率が高いということが分かった。さらに、これらの倒置構文では倒置要素を付加することにより聞き手反応を引き出しているケースが多く見られた。これらのことから、話し手が発話中に聞き手の反応がないことに気づいて、倒置要素を付加することで、相手との相互信念の形成に成功していることが示唆された。

本稿の聞き手の反応の分析結果は、話し手が聞き手に反応を求め、聞き手の反応が得られない場合に、聞き手の理解を助けるため、倒置要素を産出しているという可能性を示唆する。これは、倒置構文の使用に聞き手との相互信念の形成の役割を認める、まったく新しい視点である。今後、雑談などの会話データを使ってほかの会話タイプでもこのような分析を進めたい。

文 献

- Clark, H. H. (1996) *Using language*, Cambridge University Press
- 大坊郁夫、磯友輝子(2009)「対人コミュニケーション研究への科学的アプローチ」大坊郁夫、永瀬次郎(編)『講座社会言語科学3:関係とコミュニケーション』, pp. 2-35, ひつじ書房
- 江口巧(2000)「日本語の倒置文:情報提示の方略」『言語文化論究』12, pp. 81-93、九州大学大学院言語文化研究院

- 藤井洋子 (1991) 「日本語文における語順の逆転—談話語用論的視点からの分析」『言語研究』99, pp. 58-81
- 藤井洋子 (1992) 「日本語の会話文における主節前置の談話語用論的分析」『放送大学研究年報』10, pp. 103-122
- 小磯花絵、伝康晴、前川喜久雄 (2012) 「『日本語話し言葉コーパス』RDB の構築」『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』
- 前川喜久雄 (2004) 「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15, pp. 111-133
- 丸山岳彦、高梨克也、内元清貴 (2006) 「節単位情報」『国立国語研究所報告書 124: 日本語話し言葉コーパスの構築法』, pp. 255-322
- 小椋秀樹 (2006) 「形態論情報」『国立国語研究所報告書 124: 日本語話し言葉コーパスの構築法』, pp. 133-186
- 高梨克也、榎本美香 (2009) 「『特集-聞き手行動から見たコミュニケーション』編集にあたって」『認知科学』16(1), pp. 5-11